

子どもの本

研究会



【私の一冊】

『ゼロひきのゴースト』

宮沢 賢治・作 (福音館書店)

米田 真由美



「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモ マケヌ 丈夫ナカラダヲモチ」と続くこの有名な詩は、学生時代だれもが暗記させられたことだと思えます。かつて、我が家（実家）には、両親が娘たちのため買い揃えた『東京子どもクラブ』の絵本とレコードがセットになったシリーズものがありました。小学校へあがる前、絵とお話と音楽の三点セットで楽しめるレコードは、あまり外で遊ぶことのなかった私にとっては、唯一ひとりでも楽しむことができるもので、そこに「ゼロひきのゴースト」がありました。

楽団いち落ちこぼれのゴーストの家へ、毎夜毎夜色んな動物が色んな理由でやってきます。演奏会は成功のうちに終わり、ゴーストがアンコールまで引き受けるまでに腕をあげるといふストーリーですが、賢治作品のなかでは、起承転結がハッキリしていて、屈託なく、その主人公と動物たちの間の度重なる交渉が細部まで透き通っており、素朴でふしぎでとぼけた感情がそのままリズムをもって伝わってくるのが、幼な心にもちゃんと伝わっていたと思います。

作品のことが十分に理解できなくても、許してくれる居心地のいい作品の底辺には、いつも賢治のリズムと音楽が流れています。なので、比較的早い時期から私は賢治ファンなのです。お話し好きになるきっかけをつくってくれたレコードと絵本はあれから十数年。持ち主は私から妹たちへと受け継がれ、両親亡きあと実家もリフォームされ、現在何ひとつ残されていないが、私の中で灯として消えることはないと思います。久しぶりに、宮沢ワールドを堪能してみようかな…。



(熊本子どもの本の研究会 会員 喜界島在住)